追舞音楽考　下

曽
106
2

イ 5
106
2上

近世奇跡考巻之四

江戸　山東軒主人著

一 夢市郎兵衛明石志賀之助事

市郎兵衛は強氣の男達志賀之助は大力の相撲取にてともに寛永中をさかりに世にしらるゝ者なりし時仁王仁太夫といふ者あり。凡人にあらぬ大力にて。ちからならひ知られし。其頃京都の相撲に志賀之助と仁太夫ある人をとめたる。志賀之助兼て市郎兵衛と友とする由をもつて相撲の後見をたのみて連だちて京に上る東の大関は仁王仁太夫西の大関は明石志賀之助之。已に其日になりて両人は土俵のうちにあらむ時市郎兵衛志賀之助に對していはく。今日は汝一代の名の勝負之。もしまけなば。ともどもに汝を殺し。我は腹きりて死ぬべしとよく

夢の市郎兵衛悪輩を毆る圖

曽 門號 106 巻 2 イ15

心得へしといふさて行事團扇をそらされば両人たちむかひ互に
位を見合てやと一声さけびつゝひよ組てもみあふに市郎兵衛ハ志
がらくる目をちからかしてつけまはる時に仁太夫力やまさりけん
志賀之助を引むすびてさしあげてあぐるところ見物の諸人ま
にあせをにぎりあやぶむところに志賀之助早業の達人なれバ空
中にてひるがへりおちさまに仁太夫が胸を蹴て土俵のまん中にうち
たふせりこれより志賀之助日の下相撲開山と名告ることをゆるさるゝ
ところに仁太夫らの悪輩ども是を意根におもひ志賀之助を打
殺んとするよし市郎兵衛きゝつけて志賀之助をバ志のびやかに江戸
を下らせおのれハ黒繻子の羽織の背に明石志賀之助と金糸を以て
大文字にぬハせたるを着し熊谷笠をまぶかにきて長き刀を

さらんの木にむすび唯獨京都を発足す。仁太夫が子の者等。此ありさま
を見て氣おくれし。手をむなしくさがりけるとぞ。市郎兵衛
老後頭をそりて相州田村の邊に隠遁しけるが。兄放駒の四郎兵衛。
死まりしと事今ハ世におもひ残すことなしとて仏間にこもり
居て食をたち。念仏のことを唱へて死しけるとなん 古今侠客傳に
見えたり

(二) 秋色桜并短冊

秋色ハ小網町菓子屋のむすめ幼名を秋といふ十三歳の時。上野の花
見にまゐりて。清水観音堂の邊井の端にありし大般若といふ桜をみて

井のはたの桜あぶなし酒の酔

とよみぬ。是よりして後その桜を秋色桜といひけるよし。治凉が記

にあり。彼桜老木にて。六十年ばかり以前ハありしとぞ。案るに秋色ハ貞亭の比。其角の門人となり。秋色といふ。後に俳諧の判者となり。菊后亭と号す。ついに其角の点印を附属す。いつを昔にあるにまかせて。蜆より早苗になるや女哉といふ句あり。是秋色其角に入門の時の句なるよし 夢中庵夜話 にみえたり

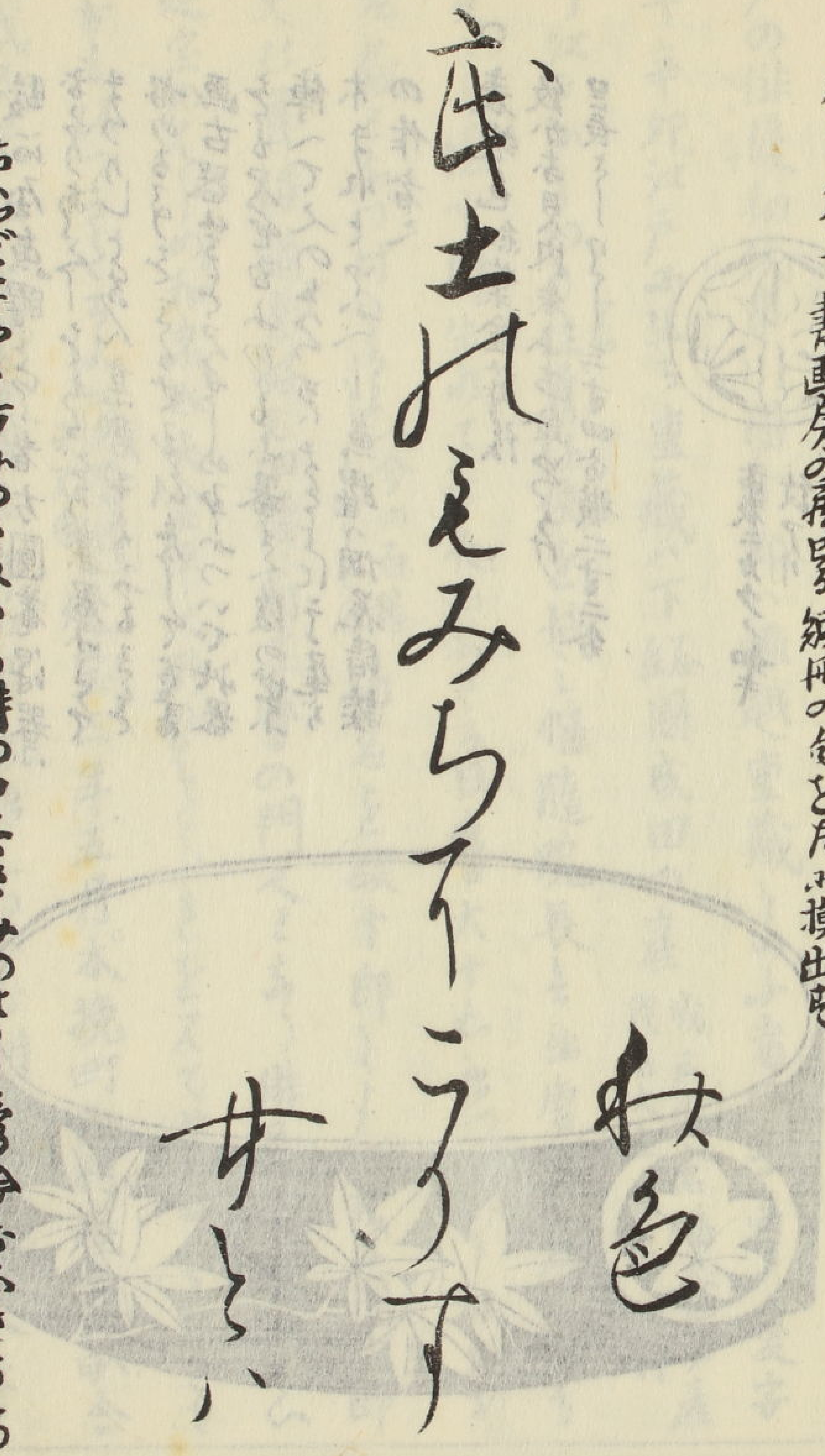
○再案。秋色ハ寒玉俗称詳をいふ者の妻なり。男女あまたの子をうめり。一男俳号を林鳥と云。二男俳号を紫萬と云。ならびに俗称詳ならず。孫女を富といへり

秋色享保十年乙巳四月十九日申刻身まかりぬ

辞世　見し夢のさめても色のかきつばた　秋色

以上秋色追善句集 雨三声 といふ書に見ゆ。その書。其瓜庵主人蔵せり

秋色短冊　秋色の墨跡なるハさまぐ多く書画房の蔵せる短冊の句をたゞに模出せり



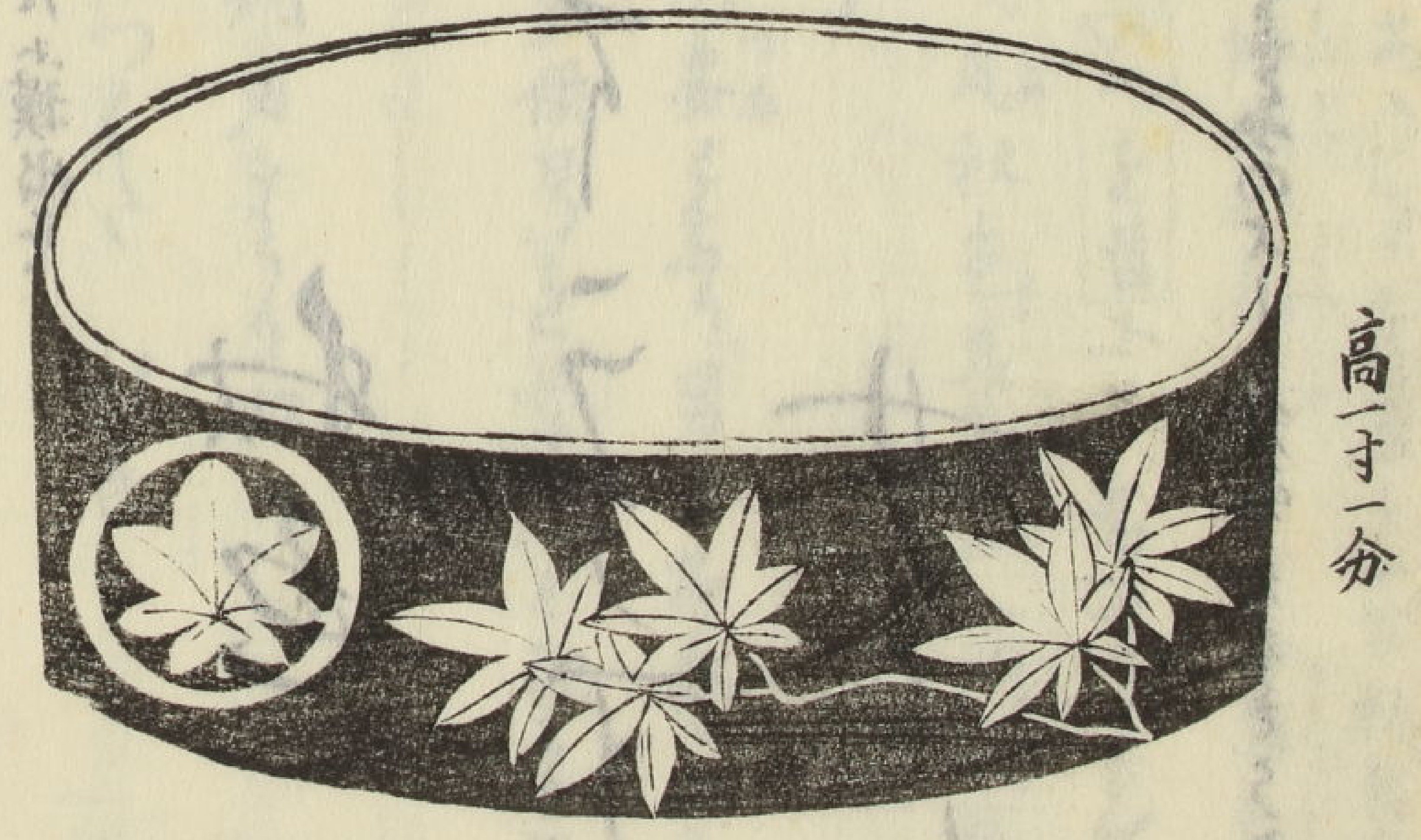
右ハ宅ところさき方にめされたる時の口ずさみのよし　秀吟なればうちわきて人の賞美せし句也

三 高尾所置髪水入圖

○此器ハ今より三十とせばかりさき吉原の駿河屋魚躍といふ者方圓菴得器におくりあたへしをちかごろ某君ゆゑありてまゐりしとある某君手から古きものを好めるよしをきゝてかくせしめ給ひ参らして古書画古器等をとりあつめ給ふついで此器をもみせ玉ふにかゝる小器さへ後の世に傳へて人の知るところとなるまゝに高尾がものなれといふべし魚躍ハ烟花清談の作者也

○表蠟色紅葉金蒔絵
紋かな貝入内朱ふち金ぶち
口長さ三寸四分横二寸二分

裏ニカクノ如キ紋アリ



高一寸一分

四 元祖團十郎傳并肖像

江戸の俳優初代市川團十郎ハ堀越重蔵といふ者の子なり慶安四年辛卯。江戸に生る重蔵ハ下総國成田の産 或云佐倉幡谷村ノ産 役者大全ニ云市川村 なり江戸にうつり住。曾任侠を好く幡随院長兵衛唐犬十右衛門等と友とす團十郎生れて七夜にあたる日唐犬十右衛門被 幼名を海老蔵と名づけたるよし 今の白猿ものがたる 初名を段十郎とよび後に團十郎と更む曾俳諧を好く旧徳翁才麿の門人となり俳号を才牛といふ。延宝のはじめ。和泉太夫金平人形のしぐさをみて荒事といふことをおもひつきたるよし 侠客傳に見ゆ 延宝三年五月。木挽町山村座凱歌合曾我といふ狂言に曾我五郎の役を始てつとむ 時に年二十五才 延宝八年不破伴左衛門の役を始てつとむ 時に年三十才 衣裳の摸様雲に稲妻

ののぞきハ「稲妻のたし又で見より不破の関といふ句にもとづけるよし江戸著聞集に見ゆ貞享元年鳴神上人の役を始てつとむ時に年三十四鳴神を堕落させる女の名を雲の絶間となづけしハ團十郎みづからつけたるよし。此筆を以て其才の秀たるをしるべし元禄七年イニ六年京に上り同十年江戸に下れり

○貞享五年役者評判記野郎立役二町弓といふ書に左のごとくあり

○此ころのひやうばん記ハみな小く半紙本之位付あり元禄の末横切本となり位付あり

▲市川團十郎　住所ふきや町なり

此市川家ハ三千世界にならびなき。好色第一の好男にて器量きりやうならぶものなし丹前のおもしろきふるまひせんかたなく天下に名を其くおしまて此人ほと出世なされるかなき藝者又とあるまじ。実に今の外何事をいひきられてみ。もろこしの芸ハ遠ざる此ころは学文の達者にて仕組の妙を知らぬものなし。当世丹前役者の元祖なり江戸において加くをならぶるものなし盛衰の勢天が下にかくれなき。おちらくハ末代の役者の鏡ともなるべき人也。きぞく家本もまつりむりん歌に市川の流れの水もすぐよく語りもうして就云者必

予おもふに末代の役者の鏡とあるべきと貞享のはじめよりおそくしハ役者の末来くらいきをも記しつべし

元祖團十郎似顔面形盃

○木ぼりにて大さ図のごとし
うらの方にて何をつむやうにまろるものあり
○面ハ白くぬりて朱のくまどりあり
○眼中ハ金箔玉眼入
○うらの方ハ黒ぬりなり

これハやんごとなき方のたまはり給ふものとて友人蕙斎主人のもとへ来てみせしむ面打のつくりとるものと見えて殊勝の古物なり

元祖團十郎肖像

談洲楼蔵本元禄六年板本
四場居百人一首ニ此畵アリ

上ニ狂歌アリ畧之

○貞享年中印本［舞曲扇林］▲江戸狂言作者 ○南瓜与惣兵衛 ○宮崎傳吉 ○市川團十郎 ○玉井權八

かくのごとく。作者のうちにもかぞへぬ。案るに貞享元禄中の狂言。團十郎の作おほし

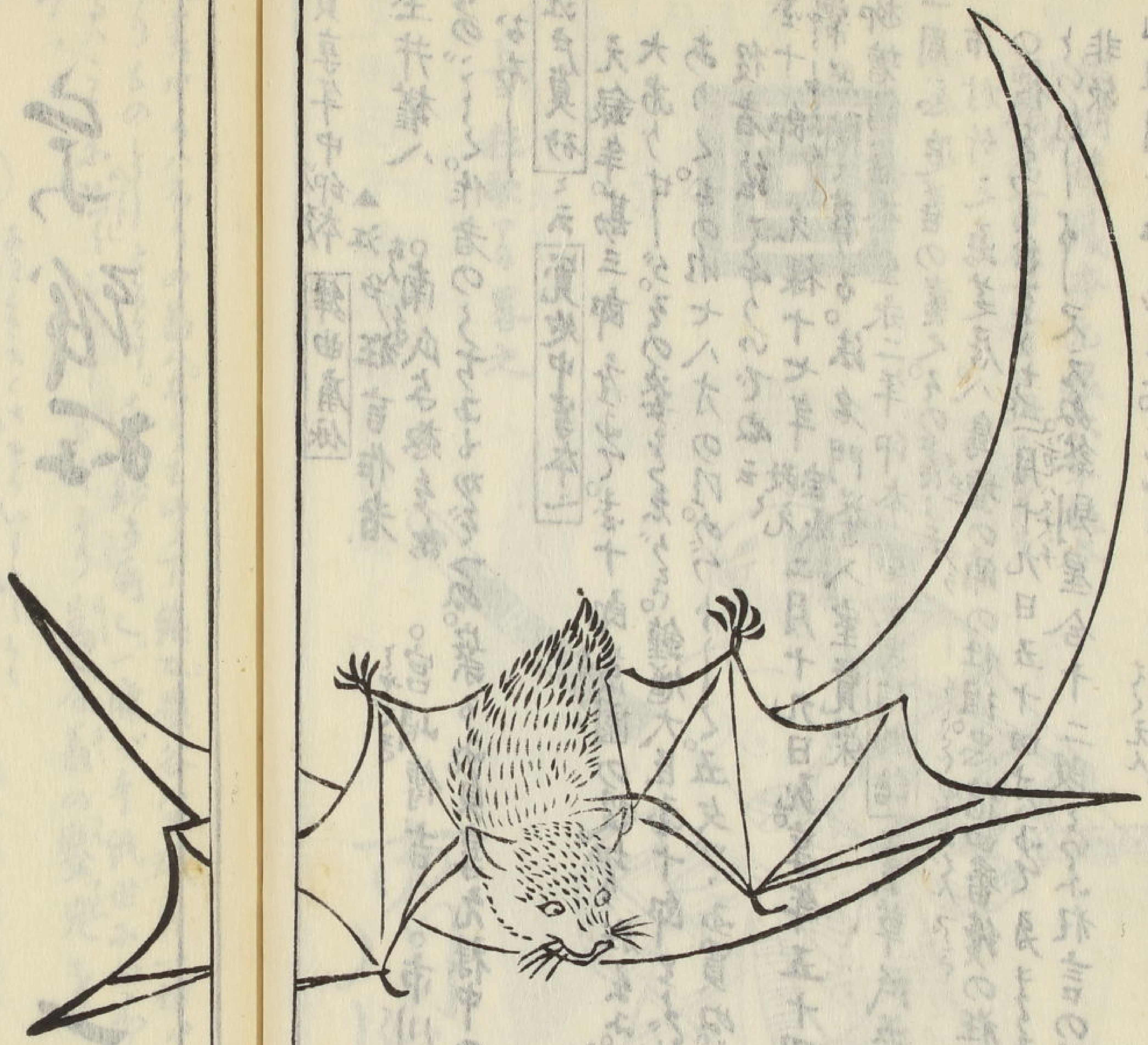
○［江戸眞砂］ニ云［寛延中写本二］元禄年。勘三郎座にて。團十郎荒園の役。切り狂言に。鍾馗大臣に成て。大当りせしが。その姿を画がき。鍾馗大臣團十郎とよびて。ちまきを売ありく。おのれ七八才のほどめづらしく。五文づゝ出買ぬ。それより殊外の役者絵をうりいでぬ云々

○團十郎 元禄十七年改元宝永二月十九日死。享年五十四。芝三縁山中常照院に葬る。法名門誉入室覚栄

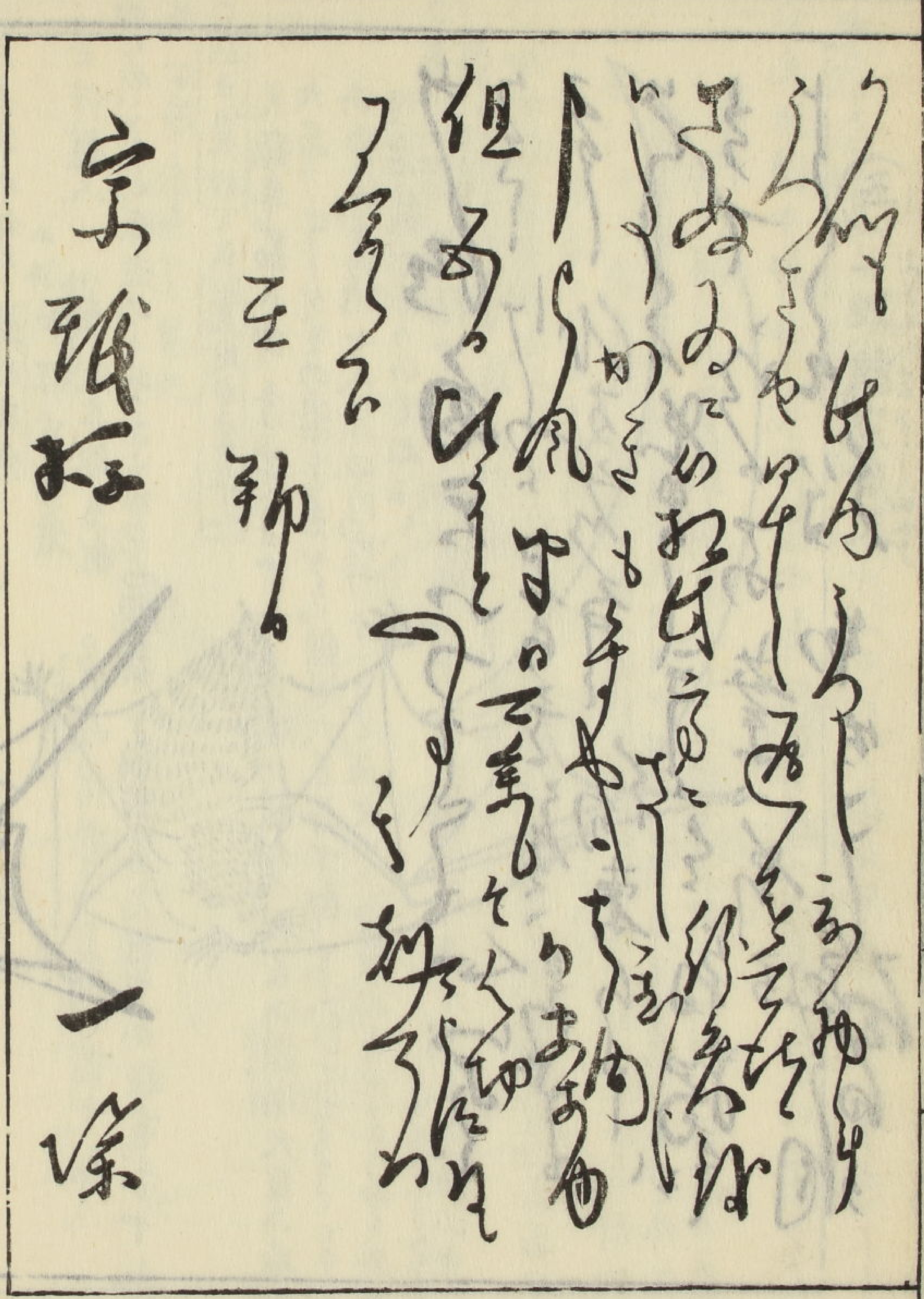
○柳塘館蔵本。宝永二年印本［宝永忠信物語］と云草紙五冊あり。是團十郎一周忌追善の書也。その詞に云 市村竹之丞芝居。八島壇の浦の仕組。忠信四番続の狂言に。團十郎次信の役をつとむるうち。二月十九日五十四才にて身まかる。幼名を升之助といひしよし見えぬ。然則星合十二段といふ狂言の時死せしと云説は非歟

○元祖團十郎實子。二代團十郎栢莚が傳は。あまねく人のしれる所なれば。ここにはもらしつ。今已に名跡七代におよぶは。誠是俳優の名家と云べし

五　一蝶贈宗珉文（いつてふかおくるそうみんにふみ）



[illegible]



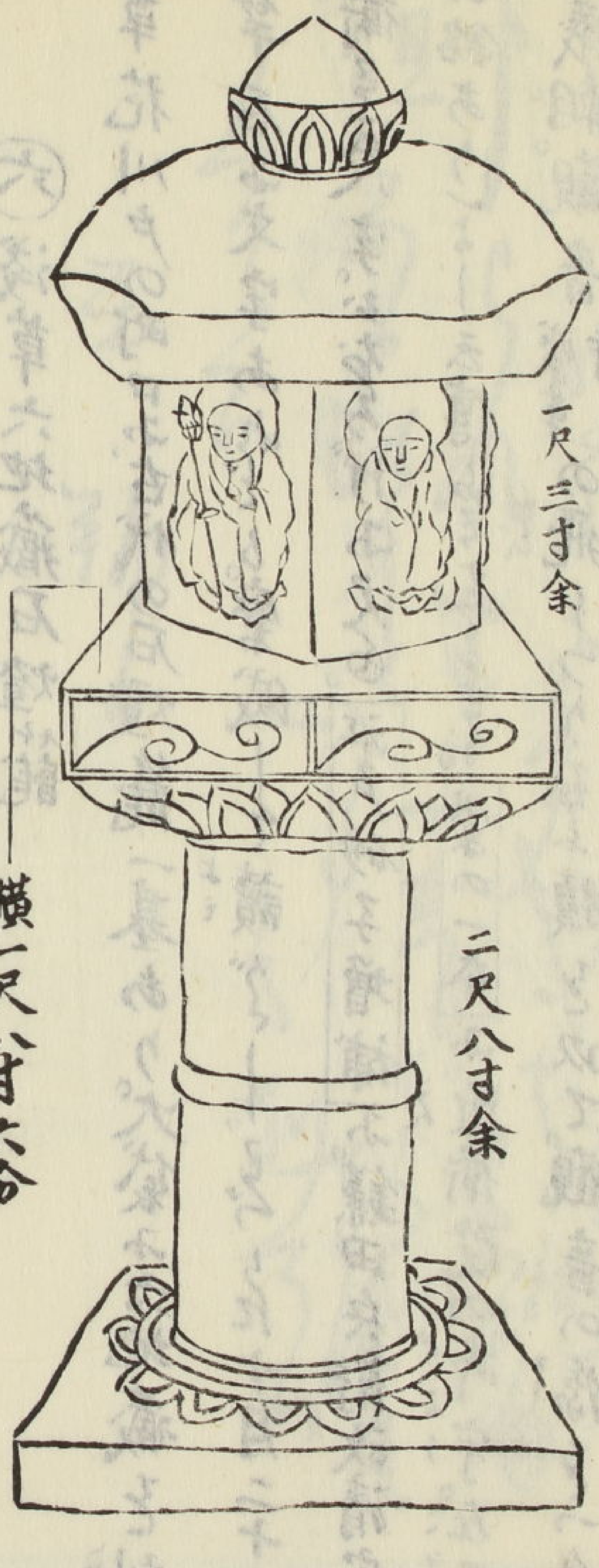
右書中にハありの畫ハ、ありものゝ下絵にて横谷宗珉へ一蝶が下絵をもつてありものをほりしところなり。人の知る所に一蝶が手紙世におほしといへども、是等ハことに稀なるべし。もとより嵩谷翁の鑑定をへて正筆のよしなり。

⑥ 浅草六地蔵石燈籠

浅草花川戸の町口に古代の石燈籠一基あり。火袋に六地蔵を刻む。竿石に文字あれども磨滅して讀がたし。只わづかに十月二十二日兵衛尉と云八字おぼろげに見ゆ。江戸砂子増補に鎌田兵衛政清寄立の銘ありしよし云傳ふと志るせり。紫の一本に近衛院の御宇左馬頭義朝、観音寺浅草の飛くつりたる槙を以て観音の像をつくり立玉ふ。今に内陣にあり。臺座に鎌田兵衛政清奉行にてかきつけありとぞ。此説によれバ彼燈籠も右節鎌田が寄立せしもの、鉄燈籠の銘磨滅しぬれバ推量の説のみにて決定しがたし。見へぬれども古

浅草六地蔵石燈籠

笠石大袋并に火袋の臺石まで一石を以てつくる竿石と沓石のミ別石也奇巧といふべし



物といへるものなり。こゝに六地蔵をつくりとみしは古きさまにて伏見の六地蔵は少納言信西の建立也。城南竹田北向不動院の六地蔵をなりとある石に暦応の年号あるもあるよし。此さくひになぞらふべし。昔は石灯籠を一基つくりたるなり。今の世のごとく堂前の左右に両基つくるはいにしへになきことなり。洛北鞍馬の堂前尾張熱田の社前南禅ちの大石燈籠ミな一基也。彼六地蔵の燈籠一基あるも又古きを証す彼是考ふるに古物なる事うたがひなし。【事跡合考】に浅草の土人が語りつたへて云昔、霞ヶ関および平川町の方より観音門前馬次にてみな旅籠町也。今存在の六地蔵石灯籠往古よりの馬駕籠の立場也といふ。ゆく市中に加る古物の残れるはめづらし。図を上にあらはすとて
○再安に彼地の古老に聞に、ちかごろ回禄の後年号磨滅せし其

以前ハ應安元年と云文字かきつけたるよしと云。然則鎌田が寄進と云ハ妄説なり。應安ハ後光厳帝の年号也。應安元年より。文化元年にいたりて四百三十七年におよべり○山の宿に嘉暦四年の古碑もあれバ。應安の時代にもあるべし

⑦浅草楊枝店始原

寛永の比ハ店をかまへず。ちいさき長櫃やうのものに入て。茶筌や楊枝をならべおきて賣けるよし。其比の者十余人。今の楊枝見世をあきなひて櫃親と云(或ハ役店)これ櫃の上にて物を賣ける証也。今に残れる也。今観音堂において追儺をおこなふ時鬼に扮するハ彼櫃親等のつとむる古例なりとぞ。以上浅草菴主人彼ひつおやのうち古老のもの説なりとて。ものがたりき

○案るにむかしハ人茶をのミ。もちゐるゝかバ茶筌をうる人今よりも多かりつらん。これ寛永元年より。文化元年にいたり。一百八十一年のむかしなるべし

⑧白炭忠知

滑稽太平記を閲に。神野忠知ハ。江戸の人也。俗称長三郎。後に長左衛門と改む。承應の比。井坂春清(立圃門人)に俳諧を学ぶ

白炭ややかぬむかしの雪の枝

此句より白炭と云名をおひぬ

其角が雑談集に。白炭とよばれし忠知が

霜月やあるハなき身の影法師

と辞世して腹切ける。いかにせまりける浮世にハありけん。哀なることにあれバ。をりをよくせざりしにや

⑨三浦高尾考

寛永二十年印本吾妻物語(元吉原細見記)をみるに。元吉原の時代。高尾と

なる妓女四人あり。江戸町善左衛門内高尾。同町甚左衛門内高尾。京町若三郎内高尾。同町九郎右衛門内高尾。以上みなもし女郎なれども。もとより三浦の高尾にあらず。その以前高尾といふ名妓あらば四人まで
もし女郎の名によぶべしともおぼえず。三浦の初代高尾は寛永の後
いでこしころなるべきかとおもはるゝけし。今杏園先生の高尾考にもとづき。古書を
参考して年序をさだめ。好事家の考訂をまつのみ

初代高尾　○元吉原の時代引據なき
によりてつまびらかならず

二代高尾　○数代のうちすぐれて名妓のきこえ高し。これを万治高尾といふ
に貞享板〔江戸鹿子〕の説を用て二代とさだむ。万治三年十二月
廿五日死。或云万治二年十二月五日死

三代高尾　○〔紬かづみ〕に高尾を許していまだ年わかきはひあがりざきの二代
高尾にはあらず。あるを以て三代とさだむ。〔紬かづみ〕に年号なき
をもつて時代つまびらかならず。いづれ延宝四年板本〔ゆめかめ石〕
に高尾ありて今はそのけまいてとあれども此高尾は寛文の末なる

四代高尾　○きこりのへうたありしつ。天和三年の写本〔紫の一もと〕に高尾がことは今
はなしとあれど。天和のころは中絶なるべし
○元禄四年板本〔幕なうひ〕に高尾あり。元禄七年板本〔草まくら引〕
ならびにやつごのひよりぶきまくおそりのとしぶてありしあれば此高
尾。元禄五六の年の
ころに出廓せしなるべし

五代高尾　○元禄十二年春出廓のよし
〔元正間記〕にみえたり

六代高尾　○宝永六年板本〔大黒舞〕に。六代の高尾とあり。証とすべし。宝永
七年春板。一枚摺細見〔大鑑〕に高尾あり

七代高尾　○引據なきによりて
つまびらかならず

八代高尾　○正徳三年板本〔赤逢染〕に高尾あり〔丸かゞみ〕に正徳五年高尾は
できしとあれば此高尾正徳四年出廓なるべし

九代高尾　○享保五年板本〔丸鏡〕に。奥州がかぶろなのぶとすれば。正徳五年太
夫となる。これ元祖より九代目の高尾なるよし。たゞしくにまへし
あり。証とすべし　○宝永六年板本に。六代の高尾ありて〔丸鏡〕
に九代の高尾。正徳五年いでしとあれば。いづれ五年などの間なり。
七代八代まで高尾二代ありしなるべし

十代高尾　○享保十三年板本〔細見の図并ニ両巴巵言〕一本にはありて高尾あり。
二代ともおなじく出廓せしにや
享保十五年板本〔両巴巵言〕に高尾なし。此高尾享保十三十四

十一代高尾

支年の間にあるなるべし。○九代目高尾も同人のやうにおもはれど、九代目高尾正徳五年に太夫となり、享保十三年まで。年数十四年なれバ同人とはおもはれず。○享保十五年より同十八年までの「細見記」をあはすべきところに、高尾なし。此間四年中絶え
○享保十九年「細見記」三本あり。二本になる高尾あり。一本「全盛鏡」といふに、高尾ありてあげまきがかたはらに、まづやう当年十月九日。太夫とあるところをよくまちなるに。又享保二十年秋本「劉家位名」「見」といふにしもあげまきがかたはらにまづやう高尾にあるところをまうさて、まつれバまたふハち。此高尾享保十九年十月九日。太夫とありしが、うみ六年を過て寛保元年六月四日出郭さて、吉原うけ證文を今に藏せる人あり。○此後の「細見記」をあまたみせて見るに。高尾なし。十一代にてさえてえたるなり。あとをたゝげし。○宝暦五年細見「入相の花」に、三浦屋ありて同七年細見「花くらべ」に三浦なし。宝暦六年家ほろびたり。

⑩ 万治高尾出生地

万治年間の名妓高尾ハ、下野國下塩原塩釜村 江戸をさること、およそ四十里 の産之。父を長助と云。子孫今にありとぞ。高尾万治中。江戸にて身まかりし時。かたみの物あまた故郷におくりこしけれども。ことごとく失ひて今ハちりぢりの物すくなし。只高尾みづから筆をとりて、伊勢源氏つれづれのことばを。抄書せし一軸のこ残れり。これは彼在世の時。故郷におくるものにて。まことの手跡なるべし。彼がおもかげを今見るがごとくおもふものなりとぞ 以上塩原にとゞまる湯盛といふ人にきゝて書しつ
○筆のついでにしるす。おなじく高尾がまくらをあつめしといふ三浦の房雲ハ、信州埴科郡鼡宿の産之。之が冒頭集にのせたり

⑫ 薩摩手小平太

「事跡合考」に云、紀州の人小平太と云者。堺町薩摩座ノ始祖 江戸に下り中橋の広小路。いまだ葭原なる所に芝居を立。人形をつかはせて。諸人に見せて是寛永年中のことなり。このほか小平太が人形。なを土偶ありしが。通四丁目に京都より下りて。江戸中に唯一人渡世しける人形師。鶴屋と云し者ありしに付て。不残木偶人形にしかうりたとぞ

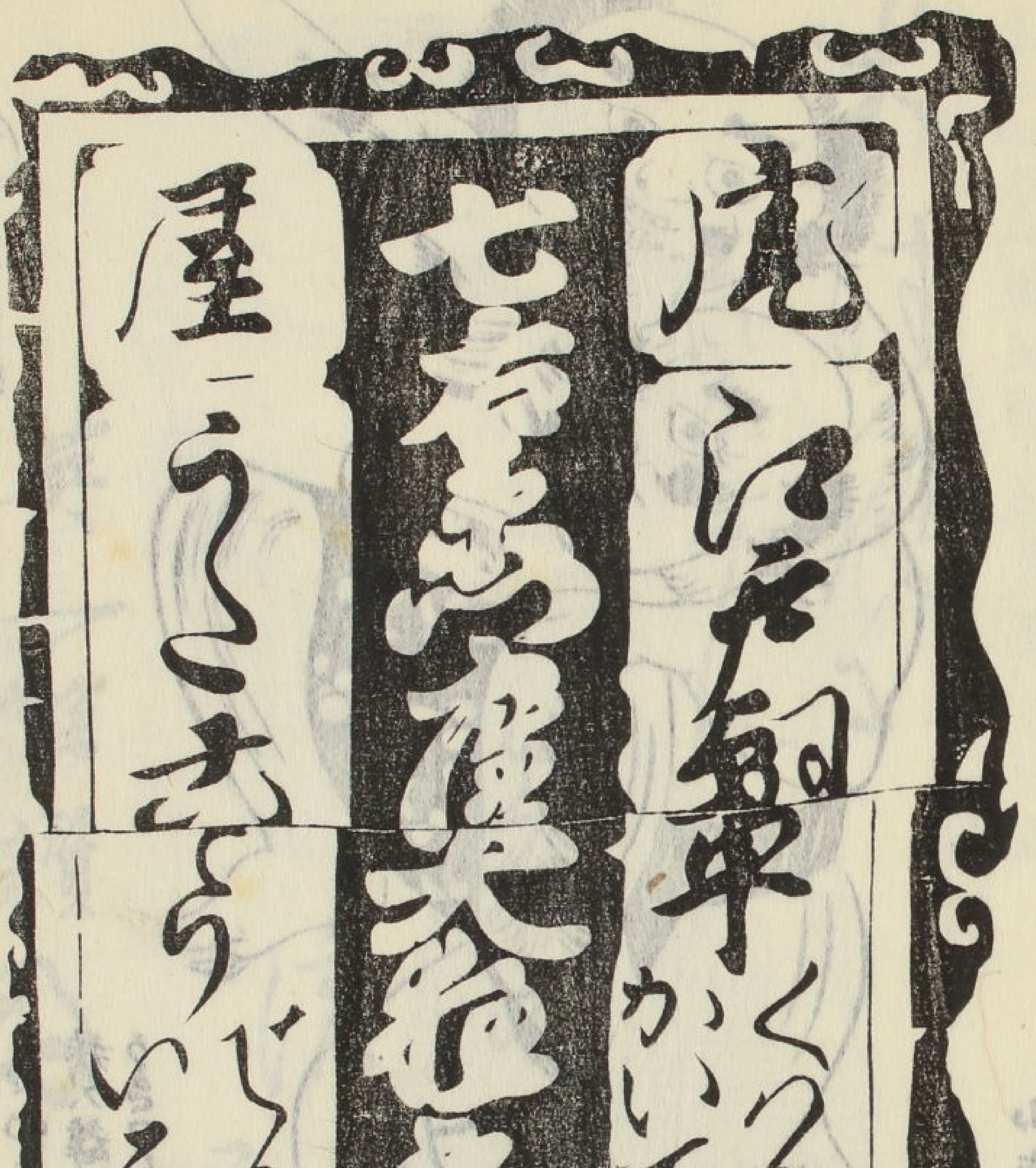
高尾揚屋入圖

小平太紙の幕を用しと云て
其頃の質素を見るべし

(十二)虎屋七右衛門芝居

昔浅草寺境内に虎屋七右衛門と云歌舞妓芝居ありしよしその頃の狂言をかざり小歌せうふをかきたるふるき板木を松蘿館主人得て硯箱につくれり年号なきゆゑよりて時代つまびらかならず。案ずるに貞享四年浅草観音開帳ありそのころのもの歟

その板木ヲ摺うつして左にあぐ。ハすゞに小歌せうふ或ハ狂言の絵などあれど。板磨滅して分明ならざるよりて略しぬ



松蘿館所蔵

十三 英一蝶大津繪讃

諸畫

此繪ハ一蝶が筆にあらず其の大津絵に一蝶賛辞をのせけるなり

山東軒所藏

右繪の上に左の如く賛辞あり

大津絵は[illegible]花の流足

英一蝶讃

十四 浮世又兵衛江口君圖

紙中長二尺七寸五分横一尺五分
縮圖ニテアラハス 山東軒清訖

かけ絵朱ひつゝに此唐子うハ衣黒地紋金泥
したかさね銀泥帯緑青鱗形金泥

十五 大高子葉烟管筒

下に図をあらはす。烟管筒ハ。大高源五。常におびる所の物なり。京師にありし時。ぶりうふ俳諧の句をかきつけて。小野寺氏の僕久右衛門と云者にあたふ。久右衛門後に金粉を以て。これを修飾しけるよし。京四条室町河津氏これを得て秘蔵しけるを。予が好古の癖あるをきゝて。これをゆづらる。別に傳系の書ありといへども。こゝには畧しつ

案るに。大高氏。俳諧を水間沾徳の門に学びて。秀吟おほし。

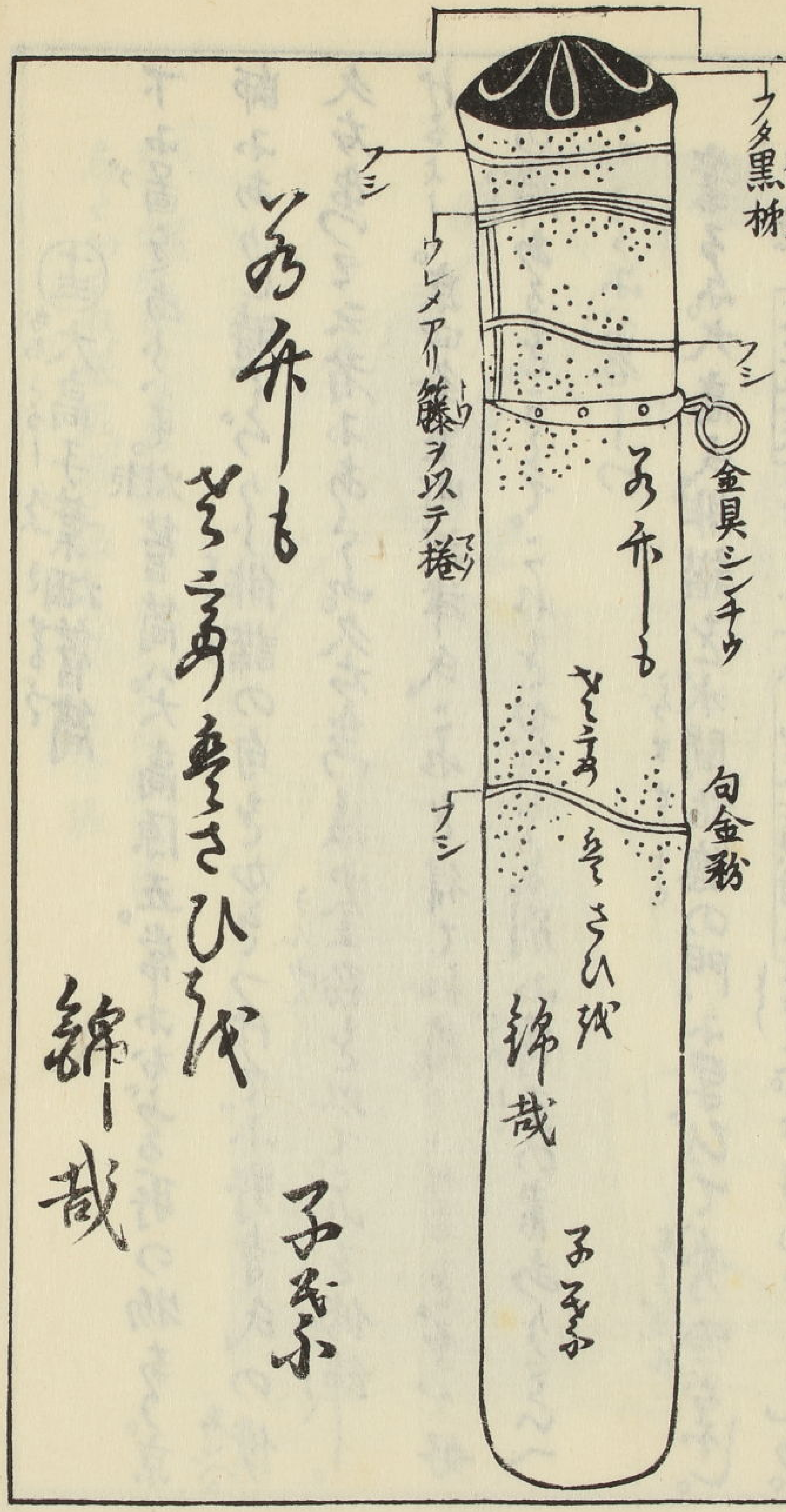
沾徳が文蓬莱其角が焦尾琴類柑子等に。其句あまた見ゆ。

沾徳。初号を沾葉といふ。ゆゑに。大高氏の俳名を子葉といへり。富森春帆。神崎竹平等。おなじ門人なり

子葉烟管筒圖

胡麻竹長八寸五分メグリ三寸五分

山東軒所藏



(十六) 深見十左衞門傳

深見十左衞門ハ本姓ハ深溝。名ハ負國。寛文の比江戸六方男達といふものゝあまたありし其徒のかしらにて強をくじき弱をたすけ人の危急を見てハすくハざるといふ事なし曽俳諧をたしミ延宝年中。難波の梅翁宗因。江戸に下りし比其門に学ぶ一時の句に

名月やきてみよかしの額際

身のたけ六尺の男なりしが額ハひろくぬきあげたれバ此句ありとぞ比の小歌に額のきハの前がミ見えぬをきてみよかしの事とぞ。うたひけるよし天和の比ゆゑありて謫せられし翌年春の句に

梅なれや花橘ハかゞねども

此句吉兆となり廿八年を過て宝永中帰郷ゆるさる老年におよびても

二尺四五寸の朱鞘の大脇差をさしたる形容年より若く見えて。氣力壮年の者に増りしとぞ。つひに剃髪して自休と称し菩提所本郷片町龍光寺のうちに菴をむすびて住ぬ享保十五年三月十八日没。享年九十歳。龍光寺に墓碑あり一應院心溪自休菴主墓とあるを傳へて云ふ十七の若かりし時人と打あひむかふ歯を二枚かゝれけるが金を以て入歯をつくり入しとぞ

以上古今俠客傳 洞房語園の説に予が考へをくはへて。かきつけつ髭の意休実ハ此人のよし。

奇跡考巻之四終

近世奇跡考巻之五

江戸 山東軒主人著

一 英一蝶傳

諸書にのせたる所誤まちくなりしかば。且もらせる事おほし。案ずるに一蝶承應元年摂州に生る父を多賀伯菴と云某侯の侍医也。一蝶寛文六年十五歳の時江戸に下り。狩野安信を師とす。姓ハ藤原多賀氏名ハ信香。一に安雄。幼名を猪三郎と云。後に次右衛門とよびけるよし望海毎談にみゆ。或云助之進剃髪して朝湖と称す。翠蓑翁。牛丸。暁雲堂。舊草堂。一蜂閑人。後門人一閑散人隣樵菴鄰濤菴。北窓翁など諸号あり。書を佐玄龍に学びて後一家の風をかきて書名あり。俳諧を芭蕉に学び其角嵐雪等と交り

ふりし俳号を暁雲又和央〔洞房語園〕と云

一蝶と称し北窓翁と号し。深川長塚町に住す〔人物志〕

享保九年甲辰正月十三日。病て没せり。享年七十三。二本榎承教寺日蓮宗塔中顕乗院に葬る。法名英受院一蝶日意

辞世　まぎらかすうき世の業の色どりもありとや月の薄墨の空

英一蝶
- 男二世　一蝶　名信勝　俗称長八
- 次男　一蜩　俗称百松。又源内　一説ニ号狐雲
- 門人養子続ニ師家　一舟　名信種　号東窓翁　俗称弥三郎　明和五年正月廿七日没

嵐雪〔其の袋〕　花に来てあはせはなりの盛哉　暁雲

同　朝霞して桜にとまれ四日の雛　同

戸塚にて

此みぎりひとり鎌倉ながら堅魚　同

〔温故集〕　此余画讃の文或ハ句あまたあり記しつくしかたし

○深川霊巌寺の後海辺新田に宜雲寺といふ禅院あり。一蝶帰郷して後。志ありてしばしば此寺に住りしよし。寺中の襖障子のゑぐひ。すべて一蝶が筆なり。中ごろ世人一蝶寺と云。其後ちかごろの回禄にかゝりしとぞ。

○一蝶の母剃髪して妙寿尼と云。一蝶謫居にある。友人横谷宗珉の家に中なふ。一蝶帰郷して後六年を経て。正徳四年三月晦日没せり

㊁朝妻船讃考

朝妻船讃　隆達がやぶれ菅笠しめ緒のかつくなかく

侍りぬ。是をしらねバあふよしもや

あだしあだ波よせてハかへる浪。朝妻(あさつま)船の浅ましや。嗚呼(あゝ)またの
日ハたれに契(ちぎり)をかはして色(いろ)を枕(まくら)はづかし。偽(いつはり)がちなる我とこ
の山。よし夫(それ)とても世の中

北窓翁一蝶自讃 □ ○

右の文世にうたひ侍るにハ。あやまりおほし。今柳塘館
不蔵(ふざう)の正筆を以てうつし出(いだ)す

一蝶若(わか)かりし時。友なる人都(みやこ)よりのつとにもて。也足軒(やそくけん)通勝卿(みちかつきやう)。船中妓(せんちうのぎ)
女(ぢよ)といふ題(だい)にて「この祢ぬる朝妻舟のあさからぬ契をたれにまたかへ
すらん」とかしるせる短冊(たんざく)を得(え)させしを。よろこびて。秘蔵(ひさう)
せしが。ある年近江の彦根(ひこね)にいたりしころ。かしこの名所をめぐりけるうち
に。朝妻（近江國坂田郡）の古跡(こせき)に目をとまり。通勝(みちかつ)卿の詠(えい)歌をおもひいでし
て懐旧(くわいきう)のあまりにやがて彼の朝妻舟のかたをゑがき。且(かつ)朝妻舟といひ

に小歌をつくりけるなん。其角が句に「柝にハ鼓もしらで歌もなし」
[五元集]にありとおもふに。是も一蝶が絵の讃(さん)なるべし。その後某侯のさ
まへに落(おち)て。市川撿校(けんぎやう)神田かぢ町がつくに合せて。一蝶がうたひしをさら
にひろしとなり。かの朝妻舟の絵につきてハ。あらぬことどもを云伝ふる
といへども。そよりのぞふ言之。人の見知りたる。船のうちにいでつ女の烏(え)
帽子(ぼうし)水干(すいかん)着たるかたをバ。一蝶晩年(ばんねん)にかきたり。始(はじめ)ハ只小舟のうちに
烏帽子でみあるが。ありしりしるさまをかきけるとぞ

以上一蝶がなれそくむ某(なにがし)の翁(おきな)その師某のかたりつたへたるをきゝて。ぞがふふ筆
記(き)する説なり。此説あきらかならずして且(かつ)うたがはしうといへども。これにつきていさゝ
かうたがへるを下にあらはせて○案るに。通勝卿の歌にもとづきしのこゝにあらず

[六百番歌合]　寄遊女恋　後京極摂政
誰ともなくよせてハかへる浪枕うきたる舟の跡もさだめず

[新續題林]　雑下　岸頭傀儡　實陰
あだ浪の枕さだめぬ河ぎしに誰とはれよとすむ陰の宿

是等の歌にもおもひよりしにや。鳥籠山ハ近江の名所也。おなじく床
にならべて歌によむ。由縁にいつはりがちなる。我とこの山とハかさこじん。
元禄の比まで八隆達ぶし残りしかバ。一蝶声よくてこれをうたひ。
且小歌の文をも作る。あまたつくれる中に朝妻舟。其ころめ一名やあだつり草
といふハうたふに書りて。そのころのはやりをうたふ。もつばらうたひし小歌也
其由縁に。元禄十六年印本[松の葉]といふ音曲本に朝妻舟の文を
端歌の部にのせて四段あり。其文左のごとし

あさつま舟

あだしあだなく浮せてハ恋る身に。あさづまぶねのあさましや。あゝまた
のひハたれにちぎりをかはしていろをぞまくらもいつわりがちなる
まゝよとこの山よしそれとてもよの中

おなじく

くらきつきのまよちぎる山の端。ゆふこゑをかけてさゝをこぐらし。あはれあさ
あやふくおもはぬ波友あきちどりしほさえぬおもひに月日をくらす
も。あゝ人心よしあしまでのうつりが

おなじく

あだしあだなる身ハうきふねの。あだなみなどのそこのつみ。あゝいくたびか。
そでにあまるあだなさけいろを。あれもとのいろを。このもみぢぞ。
ひとりこがれてまくらのあだし。あはれうき人のよくうし

右の文を案ずるに隆達が小歌の調にならひてかけるもの也。右の小歌
世におこなはれたる由縁に。そのはじめの一段をかきて絃をそへたるな
らん。一蝶自作の四季絵跋といふものに「若かりし時あだしあだ浪
のよるべにまよひ時雨朝がへりのまばゆきをいとはざるころなひ
と。かけるも。かの小歌をうたひつ。あそびがもとへ通ひし若ざかり
をおもひいでゝの文なるべし
○むかしのかさハ絃をそへたる時。別につくりたるものとおぼえて寛文
十二年印本[糸竹初心集]にのせたる小歌に

▲すげ笠ぶし

やぶれすげがさ。しやんや。しめをがきれて。ひものしやうがない。さりとはさ
もせずで。しやいさんさ。しやあさんさ。さりとてもせずとてもせず

うたあるは隆達ぶしのやうにて寛文のころ三味線にも一節切にも合せて。むかしは
ふるくうたふがのちはしがさに○隆達がやぶれすげ笠しめをのうた。ふかく侍
りぬと。かきたる文。右のすげがさぶしのもとはつくりたることをいへるなり。すげ
笠はあふみの名産あるによりて。これをうたへばあふみのやうなりとつけたるならん。すべて
は菱川のころ泉州堺に住し小哥の名人。又其傳を知るが閑吟集につきてうたひくらし之
一説作の小哥は。おほく花都とのみ題し人ぶしを付たり。そのうめのふふおも
[松の葉]に武州花都作とありこれに付をせしよしの文を作りしたるをあげて
再案に[焦尾琴]にてあさづま船に鼓を入て月をみる女の水干に扇かざしたる
絵にかきて

かもふすあげぶしはこれ月の船　其角

これも一蝶が絵の賛なるべし

㊂ 笹擁懸讃考

近曽イニ徃事夢に似たりといふぞあるまでにあらず或日螺舎其角と共に。深川なる芭蕉菴
に趣ぶ夕に至る途中の吟

きさかげのたびらぶりけてゆるらん

螺子此句にむすんで

身をうけしのめにわひきるせに

熒星くばりて芭蕉もやぶれ。螺舎もくづけることに。我のみ残る深川
の。今日わすれへんず。けふにきるせや　以上

案ずるに。貞享中。一十多賀朝湖といひて。呉服町一丁目新道に居住。年
三十五六才。其角はかれ町に居住。年廿六七才のほど。翁人芭蕉菴にいたりて。
しるさの口すさみなりと[夢中菴夜話]にいへり
えんせんもやぶれ螺舎もくづけるおり衆のこのころ深川も。くさこなは一蝶
晩年深川長坂町に居住の時。懐旧のこころをのべたるなるらん
○右讃に六十九翁一蝶とかきたる。これ享保五年に当れり

㊃ 助六狂言考

諸説皆虚妄。延享中板本[栢莚一代記]をみるに。正徳三年四月。
木挽町山村座において。栢莚二代目團十郎はじめて此狂言をせし時に年

廿六花屋形愛護櫻と云。狂言の二番目に。江戸半太夫浄瑠璃にて。白酒賣新兵衛實ハ荒木左衛門に扮する者。いく志ま某。田畑之助後に花川戸助六に扮する者。市川團十郎。傾城總角に扮する者。玉沢林弥なり。此津打半右衛門がつくれる狂言也。此前上方に万屋助六傾城總角二代紙子と云。浄瑠璃あり。正徳中。三浦屋の總角。名妓のきこえ高かりし由云に。かの浄瑠りにもとづきて作れるなり。狂言中に紙子のことあるハ。二代紙子とあるに。本のあらせたる。作者の意趣ともおぼし。按花川戸（貞享江戸絵図 舟川戸とあり古名歟）の助六といふハ。浅草三谷の侠者にてさしてこともある所行もなき者なれども。これもかの万屋助六と同名なるをもつて。三浦の總角に對して。其名をかりもちひたるものなり。彼三谷の助六身まかりし後。回向所日照山易行院と云。浄土宗の

寺に葬りたるよし（易行院ハもと北[illegible]の内と云所にあり。それのことく。京傳翁の説）鬚の意休がなりしハ。洞房語園の鬚づくしの文に鬚の達人ハ。むかしに関羽日本に朝比奈宗祇。女郎買に無休あり。十あり云。鬚の無休と云ハ。元禄中の幇間なり。十と云ハ。深見十左衛門自休がこと成べし。此人額ぎはさくぬきて頬鬚あり。鬚の十ともひげめ。名ハ鬚の無休を翻用し。仕業ハ深見十左衛門入道自休がことを取り用ひ合して以て。鬚の意休とハなしたるなるべし。又江戸鹿子をみるに。北八町堀藤屋清左衛門と云者朝顔といふ煎餅を賣る。此ころの名品なる由云に。狼藉せんべいと云ふ名ハ。まうけたるなり。其後正徳六年正月。堺町中村座において式例和曽我の二番目に[illegible]ならびかの狂言をなす。これを和助六と云。助六の扮作。ハツハ鮫鞘。一ツ印籠。これ一ト須流行の物也。明暦寛文の

正徳三年始て助六の狂言をせし時の絵本をそのまゝうつしてこゝにあらはす
是すなはち近藤助五郎清春が筆之

案ずるに此ころハ助六たかはといふ一中ぶしの文之

此時ハこしこをよって屋上にはまで狂言あり
今ハそれしこをあけ上れそ狂言おりるそれ後に男としるす

此の歌舞妓狂言の古画をみるに若衆形の踊なれバならべて紫
のはちまきをきて［江戸鹿子］に云むかしハ美童に綾羅を身にま
とはせ紫のえりをもちてさまざまにしていろいろの藝をなさしむと云。助六など
ちまきは其遺風なるべし　かゝるよしなしごとどもくだくだしくしるせるもひ
あることはあれど。今のかぶきにかなはるしるべし

五　十寸見河東傳

本姓ハ伊藤十寸見堂と号せしもなれバ以て氏とせり。俗河部屋藤左衛門
と称る由名に河東と云江戸品川町の楽家之好事世利にかゝりしが。酒
をこのみ遊嬉しつひに産を破りて半太夫梁雲の門に浄瑠璃
曲を学びつひに一家を立て。出藍のほまれあり。享保十年乙巳
七月二十日病を以て没す享年四十二築地本願寺塔中成勝
寺に葬る棺を送りて寺に至る者。千を以てかぞふ門人夕丈を
養ひて家をつがしむ二代の美を歴て。家声をおとさずして其ながれ今
におよびて河東節と称す。江戸の名物とせり牛島長命寺にも。
河東代々の墓あり元祖の法名清西とあり以上成勝寺の墓碑の文
によりて考へをくはへてしるせり

［袖ぐみ］よふ浄瑠璃本のおくに
引よせて勝より下の柳哉　　河東

江戸浄瑠璃太夫始祖
○薩摩浄雲　正保ノ頃ノ人。次郎右衛門入道
門人　長門太夫
門人　肥前太夫　延宝ノ頃ノ人。元大坂町住　肥前ブシノ祖
門人　半太夫　貞享元禄中人　幼名半之丞　堺町アヤツリ芝居座元　剃髪シテ坂本梁雲ト云　甚左衛門町ニ住
門人　河東
夕丈　門人養子
河丈

（六）竹婦人傳

享保の頃。浅草竹門に住し俳諧師岩本乾什。河東と親しく交り河東節の文をあまたつくれり竹婦人作とあるハ皆乾什が文也

○繪蓬莱　○浮む瀬　京町茂兵衛が為につくれるとぞ　○いの字扇　享保十九年訥子が為に作る

○江の島　○兎万歳　○有馬筆　○水調子　玉菊追善

○花かたみ　河東追善　此余なほあるべし

乾什ハ貫志沾洲の門人にて初名を呉丈といふ千歳児とも号す

宝暦九年二月十七日没ス

浅草寺境内人丸社の前に辞世の句をしるしたる碑あり

辞世　雪解や八十年のつかれもの

（七）万字屋玉菊傳

吉原の盆灯籠ハ角町中万字屋甚兵衛がもとの名妓玉菊より

おこれるすハ。これも知れる事ゆゑ。めづらかならざれバ更にいふべくもあらず。玉菊ハ正徳中。七月のはじめ。みまかるよしを傳ふるハ妄説也。享保十三年印本［袖草紙］玉菊追善句集といふものを案ずるに。享保十一年三月廿九日みまかりぬ。光感寺といふに葬るよし。ゆづゑいるすしるしたれがざし。始て灯籠をともせしも享保元年といふハ妄説也。玉菊死せし享保十一年七月新盆の節。新霊を祭るため。中の町俵屋虎文揚屋町松屋八左衛門等。発起せしより也。其比に七月死せしといふ人おほし。竹婦人玉菊追善の浄瑠璃水調子を作りしハ。享保十三年三回忌の時也。其比に二とせ三とせ年を經てといふ文あり。玉菊曽て河東曲の三絃をよくひきし其比に十寸見蘭洲（江戸町二丁目つるや庄二郎）とよびしゆゑ。かの浄瑠璃を作らしむ。其比時乾什かの袖草紙

をあらはせし玉菊日ごろ大酒を好ミ。つひに酒にやぶられ。廿五才にて
死せしといふ。かの句集に酒のことをいひたる句おほかりければ。さもあるべし。
水調子の文に。その酔ざめの夢の世にとかけるも。そのゆゑ之亮をたよ
げこ。そのぶといふ鏡のいへに楠の葉をいれたり。玉菊がなじむそのふ
これらのことは水調子の文を証としるべし

(八)玉菊拳すまひ

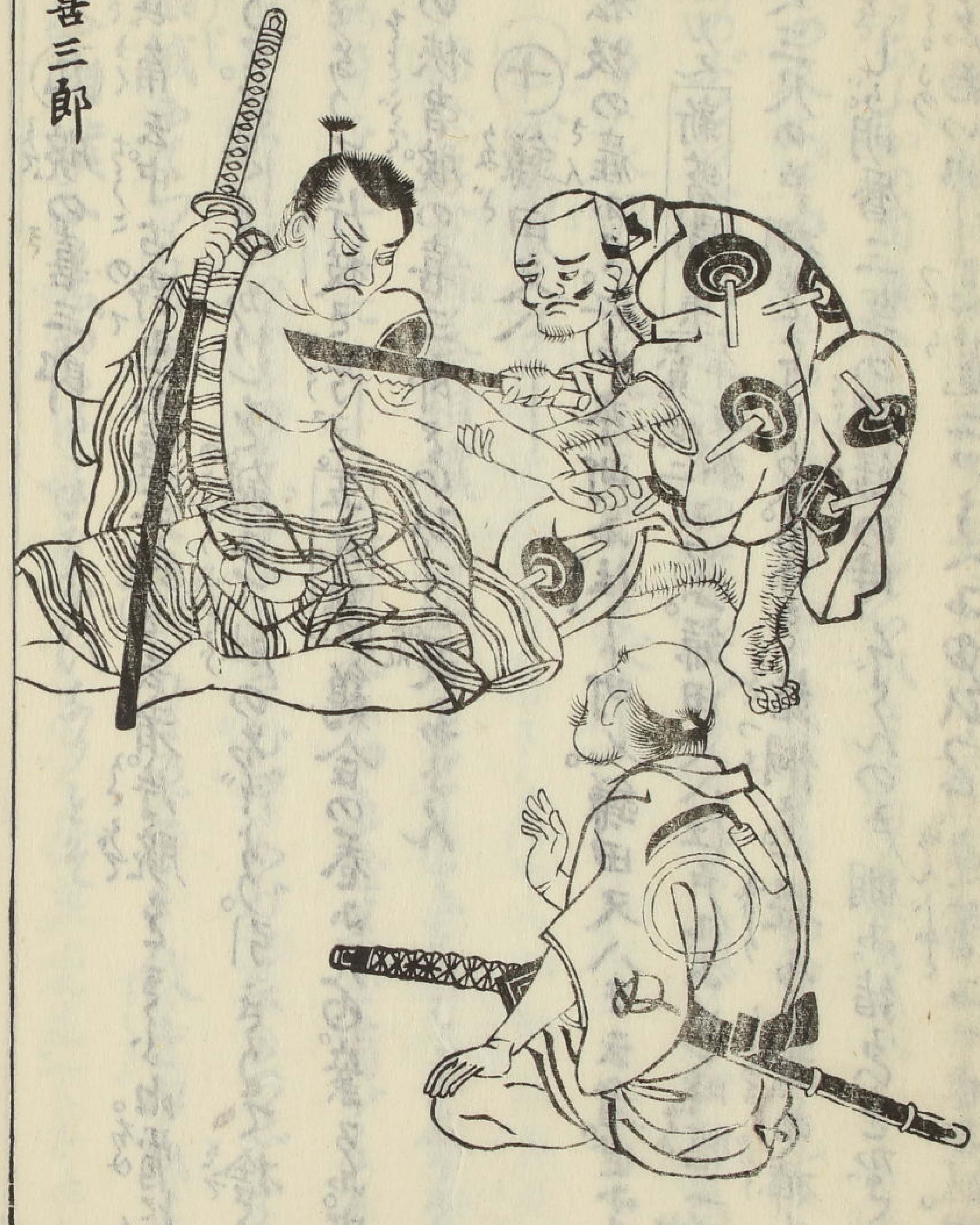
享保中酒を好む者。拳相撲といふことをして。たゝかふことはやりけるが
玉菊そのわざを上手にせしよし新吉原小田原屋某玉菊がもちたる
かひし拳すまひといふものなり。今にのこさむ甲かけといふものゝごとく
黒天鵞絨にてつくり金糸にて りくのごとき紋をぬひたり
是かの拳相撲にもちひたる手おほひなりとぞ

(九)腕の喜三郎

晋子其角云。中古野出の喜三郎と云者。片腕をきられ骨に皮
引かゝりてぶらさがりしを。鋸にて肚のあたりより引きりて捨たり。
桑門となりて片枝と号す。【五元集】鶏合の巻に又出。案るに。寛
文中の侠者腕の喜三郎といひしハ是ならん

(十)鎌田又八

伊勢松坂の産にて。江戸本町に住し町人。鎌田又八と云者。世に希
有の大力也。【新著聞集】寛延二年板本につぶ。鎌田又八江戸にありし時。幅一間
ばかり三尺の戸棚をこしらへ。ふときかき緒綱にて。一握ある樫の棒を
みんなさしば。明暦三年の回禄の時。くだんの戸棚に。緒なひをかざり
につめたる書を。つゞら二つ三つへにせひつけ。連著にてせおひ。樫



の棒をつき。其のさやさげにあるものあれバ。左右へ撥ちらして。群集をかきわけ。車長持のうへをふみ越て。浅草にのがれ去しをみるもの有り。此一事を以て強きのほどおもひはかるべし

浅草観音仏殿の柱に。又八がちからだめしの跡と云伝ふる。くぼみある所あり。寶八経ものゝあやまりて。自然にくぼみたるものなるべけれど。又八が大刀のきこえ。うちきせまにかゝりしところ。ふるき侍人とかたりし

(十一) 加賀千代尼傳

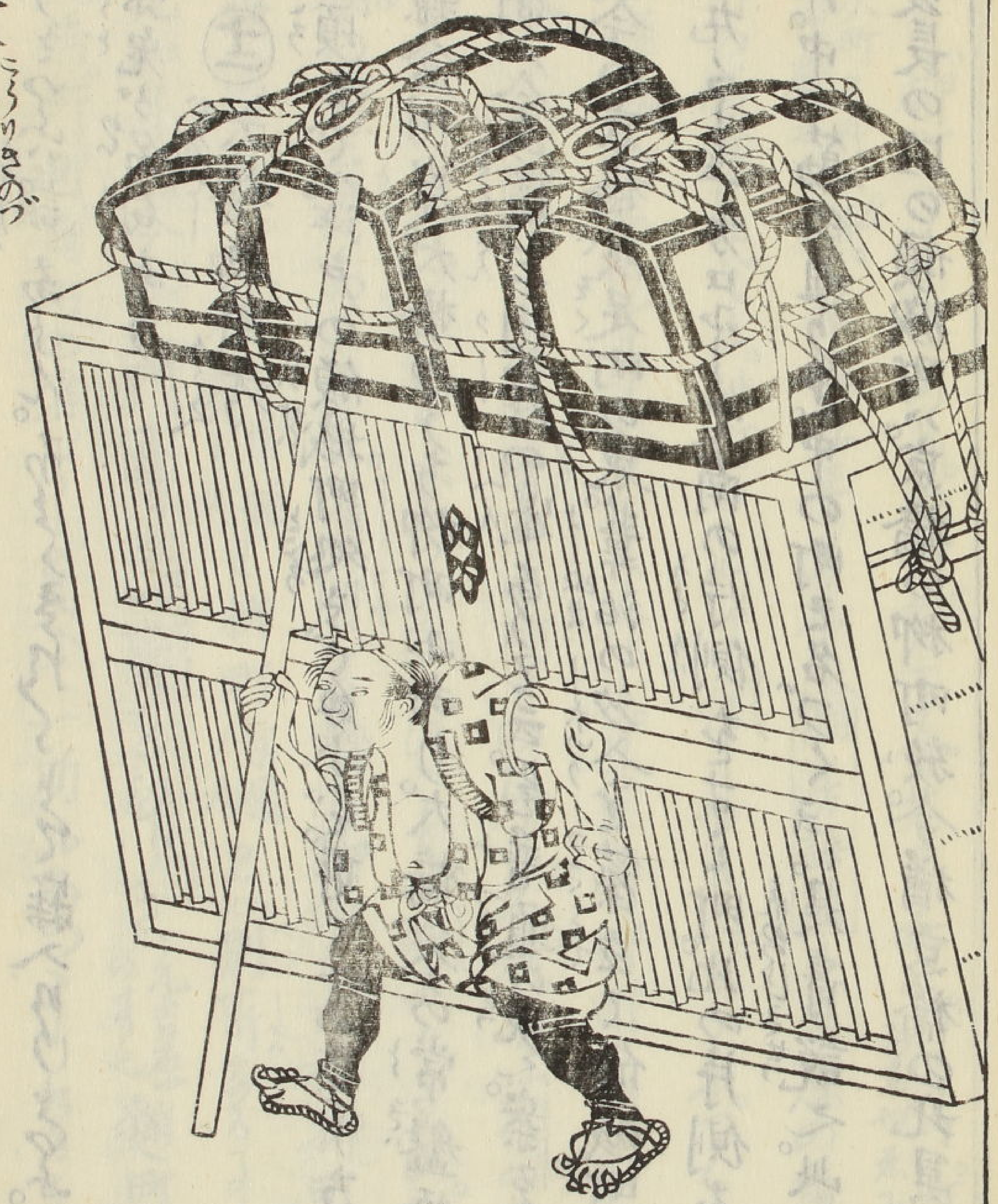
千代ハ。加賀松任駅金沢ヨリ洛ノ方へ四里去 福増屋六兵衛といふ者の女也。をさなき時より。風雅の志あり。一時俳諧の句をなせしを。父母かんじてさぞうの志あつかりて。行脚の俳人一説支考門人 蘆元坊トス を家にとゞめて学バせけり。㠯十八歳の時。金沢の福岡某が家に嫁す。其後夫身まかりけれバ。松任にかへり。父の家にありて。ますます俳諧をこのみ。年三十歳の

時京にのぼり。勢州にいたりて麦林舎乙由の門人となり。廿七歳の
時再上京す。ここに後頭をそりて素園といふ。容貌美にして言語
少く。常に閑寂を好む。画も又よくす。松任は京へゆききの要路なれば日
毎に諸國の旅客に交り。もとむるに應じて書画をあたへけるゆゑ
に。其名海内にきこえけるとなん
安永四年九月八日寂す享年七十四辞世

月も見て我はこの世をかしく哉

金沢専光寺一向宗に葬る。又松任駅聖興寺に碑を立て。辞世の句を
刻む以上 千代尼の一族松任駅村井屋小十郎がものがたりき
○千代秀吟なし。蜻蛉のちつちぎりの句。おきてみつ寐てみつの句。百なりの句
のごとくひく人口にあれど。これはもうしん
○一説に。千代北越の呉俊明に絵を学ぶといふ。ここに俊明の孫秀湊
角主人にまみえて。をりしに。其説にしかはあらずといひき

鎌田又八強力圖



○又一書に「あらきなくとてあけなりけりといふを。千代が初学の句ありといふハ誤なるべし。あらきなくとて寐入りけりとぞ。伊勢の涼菟が名句あり

(十二) 大橋柳町の考

慶長の頃まではハ。江戸の傾城町処々にありしうち。麹町八丁目。鎌倉川岸。大橋のうち柳町にあり。大橋ハ今の常盤橋の古名也。柳町ハ今の道三川岸の邊なりと云。是普通の説也。案るに【事跡合考】云。今の京橋具足町の東。葦沼の汐入を築立て傾城町とせし。其地取丸くし。一方口にして。南の片側をすミ町。北の片側を柳町と名づけ。中一筋の通りを中の町と名づくと云。是奇説也。此説によらバ。慶長の頃の傾城町ハ。京橋の柳町歟。今猶京橋の北具足町

につゞきて。柳町すミ町あり。両町背を合せたる町也。すミ町ハ町のすミなる由ゑに志かいふ歟。今ハ炭町とかく。私に云。竹町と云。竹屋おほし 享保五年写本の【洞房語園】に。吉原の角町ハ。京橋角町の傾城屋ども。此町にうつり住し由ゑに。志か名づくとあれバ。京橋に傾城町ありしもあきらけし。具足町柳町の間の通りを。すべて今に中通りと云也。昔中の町といひし名残歟。「恋のあをりのふさもと柳。風にふかれてどちらへなびこと。小歌にうたひ。町の入口に大樹の柳二株ありしと云。舊跡ハ。京橋の柳町也。大橋柳町と一口にいひ傳へぬれど。大橋今常盤橋ト云と柳町京橋ノ北とハ。別所なる事知るべし。其後元和年中。今云大門通りに。一廓を築きて。元吉原のこと也麹町。鎌倉川岸。大橋。柳町。角町の者ども。まじへて一所にあつまりたるうち。柳町の者ハ。江戸町二丁目にうつる。由ゑに此町を本柳町といふ。角

町の者のよりしハ甚偶角町と名づけゝるよし。これも写本[洞房語園]の説也　江戸町二丁目を本柳丁てかきたる沽券今はありといふ又[洞房語園]に見ゆ

㊂因に云。角町仕立服引といふハもと京橋の角町にて仕立ものしける処に。ゆゑにいふ。近きころまで。此処に服引の軒をならべてありぬ

㊉三 地黄坊樽次酒戦

慶安の頃。江戸大塚に。地黄坊樽次と云人あり。実名茨木春朔。某侯の侍医也。古今希有の大酒にて酒友門人甚おほく。その頃名高き人也。又狂歌をよみぬ。或云鶏声が窪に居住のよし　小石川柳町祥雲寺に。樽次の石碑あり。正面に不動の像をきざみ。右は酒徳院酔翁樽枕居士とあり。左りに辞世二首あり

これ人の思ひこそかゝれ死出の山打越えみれば[illegible]路

南無三ぼうあまたの樽をのみほして身ハあきたるに[illegible]

臺石に延宝八庚申正月八日とあり。[沽涼説]て樽次の遺骨を葬しハ谷中三崎妙林寺之樽次貧の法名ハ信善院日宗と云。祥雲寺の碑ハ酒門の高弟菅任口と云者建しとぞ

○おなじ頃武州大師川原に。大蛇丸底深と云富農あり。樽次におとらざる大酒にて酒友門人おほく名高き人也。其子孫今に栄ふ

[続さるみの]　その蔓や西瓜上戸の花の種　　大師川原にむかひて樽次と云ものゝ孫にあひて　沽園

（続猿蓑に樽次ト底深トあやまりしか）

○又おなじ頃鎌倉に甚鉄坊常赤と云者あり。もとは真言宗の僧なりしが還俗し樽次に医を学びて業とせり。樽次底深につゞきたる大酒也

○酒戦　洞房語園に江戸吉原の医師縣升見と云者浅草が原に月庵にて大師川原甚哲と酒戦勝劣ありと記せり。此坊がつけあるべし。慶安の頃大かたあつまりて酒兵をあつめ大盃をもつて酒量をくらべ。樽次底深を大将として敵味方とわかれてのみてかちまけをあらそひし事。これ大居目乳古仏の[illegible]水鳥記に見えたり

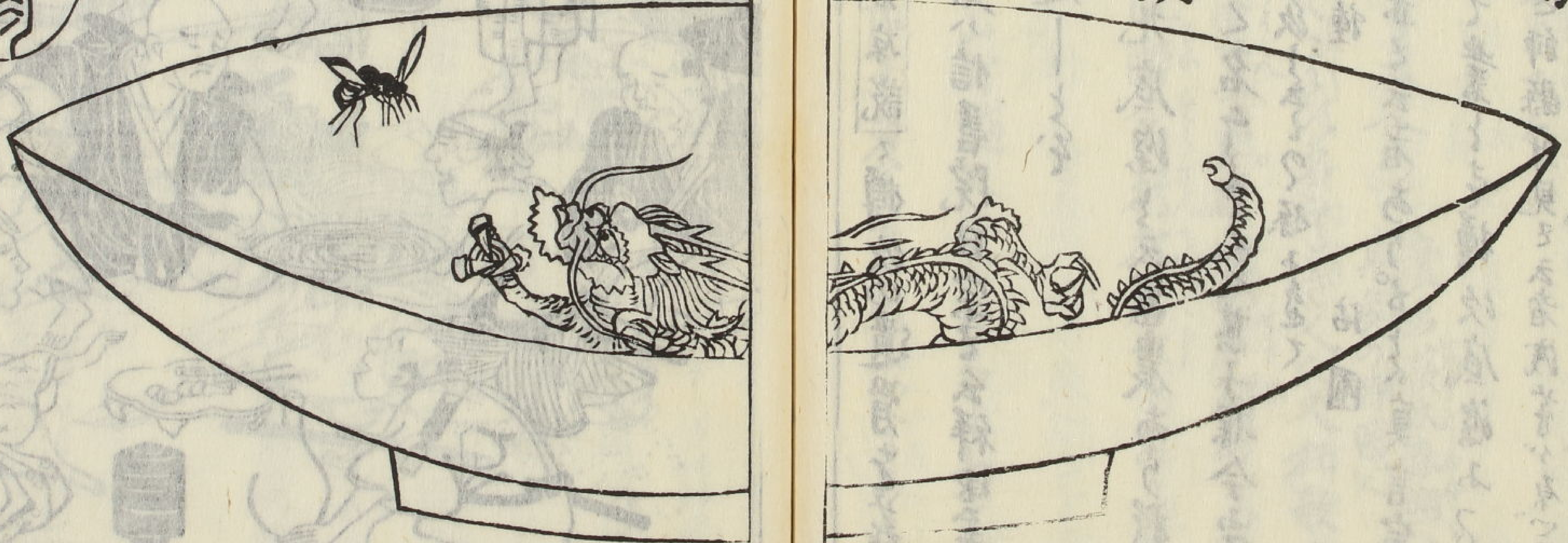
蜂龍盃図

予ハさき大師川原にある
盃をみんと思ひ友人木村太朝をともなひ
平砂の絵をうつしてかへる
あふハその絵の上に賛詞
あり左の如し

大塚乃大酒官北尾坊精次
二子者中次郎参太郎
よめよくのめとてもつに倦ず
深蜂龍といへる盃を以深と
号

酒よとも
子をえ起こしや
花能財
呆花林
平砂老弄跌

昌珍



酒戦の図
ぢんてう

たるつぐ

○蜂龍盃　これは海戦に用ゐる七合入の大盃に蜂と竜と亀の蒔絵あるさかづきのまゝ着をさむるところとぞ底深子孫大師川原の某氏今これを藏す

○水鳥記　二巻あり樽次の自作底深と酒合戦の戯書なり原本大師川原にあり世に流布の印本二本あり一本は寛文二年京板一本は江戸板上木の年号なし これは絵入のなき本なり

㊃庶蔵猿次郎

貞享中の印本【舞曲扇林】二冊河原崎権之助作 に云草紙に六方とは佐渡島歌舞妓乃時名護屋山左が下人に庶蔵猿次郎とて両人あり山左を六條傾城町に行かよふ時供しけるが庶蔵は生れつき奴にて度々に出てあふけなきさまをいひて興あり猿次郎は自然ときこしき男なりそてものいひおかしさに毎笑をもよふせり佐渡島歌舞妓の時【羅山文集】を考て三左彼友人を役者として佐渡島にてしくみし奴と見えたり慶長十九年

庶蔵つとめけるより庶方といふ六方とも六法とも誤りしや猿次郎は今の狂戯之これは狂言のせりふに私は今日の猿馬鹿でござるといひて笑せけり後年猿若といひしなるべしかの庶方は多門庄左衛門の延宝より奴の風俗よくありて誇をなし供奴つれてはやしけるより庶方あるく毎にはやりけるこれより前は紺のうへ袴にて髭をなげまあしにてはやしけるなる 案に坊主小兵衛などもつくりこれをまなびて今奴丹前といふ この道の風数 猿次郎より後に猿若といふものは猿若三作江戸にて中村大勘三郎彦作といふ 以上

庶方猿一事の説は信じがたけれども庶方猿次郎のことは奇説なればこゝにかきつけおきつ

【雍州府志】云其称猿若者三左衛門所毎赴之娼家奴隷男有猿者性魯鈍而不通人情三左衛門常玩之至今有狂言猿若是皆所假為猿若者也云々　右にいふ三左衛門は傾城町の名なり三左衛門の此説前の【舞曲扇林】の説に似たり【雍州府志】は天和中の書なりけれはおなじき時の人なるべし

奇跡考巻之五終

東都書林
鴈金屋
青山清吉
小石川傳通院前大門町